

## 過去から未来へのおくりもの（斐伊川治水事業）

私は、平成18年4月に中国地方整備局を37年の歳月を掛けて卒業させて頂きました。公務員としての37年間は、大阪万国博覧会やアポロ計画の月面着陸など、日本や世界の新しい時代の到来に夢と期待を膨らませた感動の社会人一年生から始まりました。

国内の社会経済は、オイルショックやバブル経済の崩壊などの試練を乗り越え、豊かさや利便性、そして安心して暮らせる社会が現実のものとなりました。

私自身が、若い時代に夢に描いた未来が現実のものとして実現しつつあることに大きな喜びを覚えます。

とりわけ、昭和46年4月から昭和55年3月までの9年間は、出雲工事事務所（現：出雲河川事務所）において、斐伊川治水事業に関する職務を担当させて頂き、その時の経験が退職後も充実感を感じながら生きていける根源と感謝しております。

私は、斐伊川治水計画の立ち上げから「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画の具体的内容」までの計画策定に参画させて頂きました。

斐伊川治水事業計画の初期段階は、昭和40年代後半から大学や大手の民間コンサルタントに電子計算機の導入がされ始めの頃でした。

中国地方建設局（現：中国地方整備局）においても、昭和46年頃に新設の電子計算センターが開所され、事務フロアー全体に大型

電子計算機（TOSBAC 3400）の機器が導入され、事務処理業務にフル稼働していました。

当時のコンピューターは、給与計算などの定型的な事務処理に威力を発揮し始めの頃で、現在のパソコンのような並行処理能力も無く、CPU（中央処理装置の容量も256KB程度）も現在の家庭用パソコン並みの能力であったと思います。

私は、出雲工事事務所の調査設計課に在職し、降雨関係や流量関係の集計から分析までの業務を担当していました。

当時は、一人に一台のパソコンが与えられ、黙々と画面を見ながら仕事をこなす現在と違い、各課には15名程度の職員が配置され、先輩から後輩に仕事を伝えつつ、手作業で業務をこなす時代でした。

昭和47年7月豪雨災害は、松江市や斐川平野や出雲空港が一週間以上も水没した大災害でした。

出雲地方の生い立ちは、国引き神話に語り継がれるように国造りの歴史があります。広大な出雲平野は、斐伊川上流の砂鉄採取に伴う大量の流砂と、斐伊川の西流や東流を繰り返した氾濫の戦いに先人が挑み、労苦を重ねて形成された歴史があります。

斐伊川治水計画は、宍道湖周辺の治水と天井川の宿命を背負う斐伊川本川の治水を抜本的に解決する対策が必要となります。

明治の内務省時代から、斐伊川が氾濫するたびに、宍道湖の治水も併せて解決するため、斐伊川本川から大社湾に洪水流を分流させる放水路計画が提唱されてきました。

昭和39年に島根全県を襲った集中豪雨災害では、昭和40年、41年に斐伊川放水路計画を主体とした、斐伊川治水構想が建設省

(現：中国地方整備局)から地元に提示されました。

しかし、関係地域の同意を得ることが叶わないまま、昭和47年7月豪雨を迎えました。

昭和47年7月豪雨災害は、出雲地域の発展に不可欠な抜本的な治水対策として、明治29年に関屋技師が提唱された3案の治水計画案から約80年の歳月と、幾度の試練を乗り越えて本格的に動き出す契機となりました。

私は、動き始めた斐伊川治水計画の流出解析(想定される降雨パターンを基に、斐伊川や神戸川流域からの流出量を計算し、川の基準となる場所の時系列流量を推計する業務)や、斐伊川本川や宍道湖・中海流域からの流入水や大橋川・境水道から流出する水の差分による、宍道湖・中海の水位解析を担当しました。

斐伊川治水計画は、斐伊川本川や神戸川本川に計画される2つのダム計画や斐伊川本川からの分流、神戸川を含めた斐伊川放水路の治水計画、宍道湖・大橋川・中海・境水道の計画の他に、当時は食料確保を図る目的で最盛期であった、中海干拓事業の淡水化をコントロールする目的で設置された中浦水門の操作まで、多くの設定条件をクリアーする計画策定が必要でした。

それまで、手作業で行ってきた業務体系では、一機に高まった気運に応えるための計画づくりは不可能との判断もあり、中国地方建設局に導入されたばかりの電子計算機を利用し、膨大な解析関係の業務をこなす事となりました。

しかし、当時は民間コンサルタントが育ち始めたばかりの時代です。民間コンサルタントにおいても、複雑多岐な検討を必要とする斐伊川治水計画に対応できる汎用プログラムは現存しておりません

でした。

斐伊川治水計画の策定作業は、検討資料の収集から解析・検討・設計業務まで職員自らの直営作業でした。私も、斐伊川治水計画プロジェクトの一員として、流出解析のプログラミングから創らせて頂きました。

中国地方建設局に導入された大型電子計算機は、通常業務が終了してからの夜間利用が、技術計算の時間帯として割り当てられておりました。

私達は、電子計算センター（本局）の占用予約が取れる度に出雲から広島市まで通い、徹夜で電子計算機を稼働しました。

斐伊川・神戸川流域からの流出解析や宍道湖・中海の水位連動解析結果、段ボール数個分の計算結果を毎回持ち帰り計画を収斂する作業に3年程度没頭したと思います。

昭和50年4月に島根県知事に就任された恒松県知事は、斐伊川治水事業を県政の最重点施策として取り組まれ、県知事の強力なリーダーシップにより昭和50年11月に「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」が発表され、斐伊川治水計画の大きな転機となりました。そして、昭和51年6月には「斐伊川工事実施基本計画改定案」が河川審議会で了承され、本格的に斐伊川治水計画が動き始めました。

しかし、斐伊川治水計画が前進した一方で、神戸川沿川を住まいとされる放水路関係者の危機感は増大していました。

昭和52年12月26日には斐伊川・神戸川合流反対期成同盟連合会（6,500戸）の各地区から約200名の住民代表の方々が、出雲市役所と出雲工事事務所に押しかける事態となりました。

その前日、出雲工事事務所の会議室で警察関係者との事前打ち合わせを行いました。不測の事態に備えるべく機動隊の待機場所についての協議に私も参加し、興奮したことを覚えております。

出雲工事事務所では、着任して半年も経たない定道成美事務所長が斐伊川治水を陣頭指揮されていました。

定道成美事務所長に、警備体制について報告したところ「反対期成同盟連合会の方々が本気で来られるのだから、私もこの身をもって対応する、特別な警備体制は取らないで頂きたい」との伝言を警備関係者に伝えるよう指示されました。

その時、定道成美事務所長は、明日は普段着の服装で出勤し、不測の事態が発生したときは一部始終をカメラに納める旨、カメラマンの指示を受けました。

反対期成同盟連合会の方々は、ムシロ旗を立てながら大挙して出雲工事事務所に放水路計画絶対反対の意思を示しに来れました。

定道成美事務所長は、正面玄関中央で反対期成同盟連合会長から反対の趣意書を自ら受け取り、自分の話も聞いて欲しい旨の要請をされました。

私は、事に当たり逃げず怯まず誠意を持ってあたる大将の姿を側で見させて頂きました。

昭和54年11月には、「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画の具体的内容」が島根県と共に関係団体に提示され、事業着手一步前の昭和55年3月まで出雲工事事務所でお世話になりました。

斐伊川治水事業は、昭和58年の用地調査着手から10年を経た平成6年5月に念願の斐伊川放水路の起工式を迎え、平成20年の現在は開削部及び拡幅部共に放水路としての姿を確認できるまで形

を整えてきました。

現在、私は、縁あって3回目の勤務地として赴任し、歴史に残る斐伊川治水事業を担当した出雲市内に居を構えました。

平成18年7月4日に、兵庫県豊岡市長の中貝宗治氏を迎えて平成16年10月に台風23号により被災した教訓を生かすための「防災・減災フォーラム」がビックハート出雲で開催され、災害に対する備えの大切さが再確認されました。

しかし、2週間後の平成18年7月19日の未明は、公務員時代とは違い、洪水や地震などの災害時の緊張感から解放された私でしたが、前日からの雨脚に、斐伊川や神戸川の増水が心配で寝付かないまま、一夜が過ぎました。

そして、朝方の4時には、家族の制止も振り切って増水した斐伊川や神戸川の見回りに行きました。

朝方の出雲市街は、放水路の開削により出雲市街地に流入していた山地流域からの流出水のカットや、神戸川河口部の開削拡幅効果による河口部水位の低下背水や、市内河川の改修が功を奏し、それまで幾度と無く発生していた市街の内水被害も殆ど見あたらないまま、何事もないような静かな眠りについていました。

ところが、目に映った両河川の姿は、昭和47年災害や昭和58年災害を経験した私も、初めて目にするような大変な大出水でした。

斐伊川堤防は、計画洪水位近くまで増水し、危険な状態にありました。

神戸川では、旧堤防が完全に水面下に水没し、倍近くの川幅に拡幅された放水路堤防の川幅一面に洪水流が流れていました。

斐伊川本堤は、関係者の水防活動もあり辛うじて破堤を免れました。

また、出雲の中心街を流れる神戸川は、手の施しようがない大出水でした。斐伊川放水路事業の進捗が数年遅れていたら、神戸川の旧堤防を越水した洪水流が出雲市街を直撃し、出雲市街地は豊岡市以上の被災に遭遇していたと思われる。

しかし、私が放水路の堤防上で胸をなで下ろした同時刻頃、神戸川上流域では避難途中に3名の尊い命が濁流に呑み込まれ帰らぬ人となりました。

私は、多少の痛みや悲しさは時間が解決してくれると思いますが、家族の生命や生活の場を失うほどの深い悲しみからは、誰もが立ち直り出来ないのではないかと考えています。

私達には、過去を振り返り未来を展望できる知恵があると思います。多様化し変化する社会環境や、地球環境の激変を先読みし、将来狼狽えることのないよう、弛まない歩みが何時の時代も必要と思います。

私は、土木技術者の端くれとして微力ながら斐伊川治水事業を担当させて頂きました。日々の生活の中で、生命財産を守る斐伊川治水計画に参画させていただき、多少なりとも貢献できたと思う心が、私の自信と誇りとなっています。

平成20年の今日、斐伊川放水路や斐伊川・神戸川上流に建設中の両ダムは、完成まであと僅かとなりました。

斐伊川治水計画は、松江市の中心街を流れる大橋川の改修に続いて着手され、県都松江市の発展が約束される日まで歩み続ける必要

があります。

これから、斐伊川治水事業が円滑に進捗し、将来に生きる人々に「過去から未来へのおくりもの」として喜ばれることを夢見ながら、再度社会の一員として貢献して行きたいと思っております。

追伸 私が立ち上げているmyホームページにヤフー検索で「西村くんちの家」と入力され、「私の仕事部屋」に掲載した研究論文を一読して頂けると幸甚に存じます。

平成20年5月7日

まるなか建設株式会社

研究開発室 部長 西村 明